

セネガルにおける写真の歩み

—写真表現が照らし出すセネガルの社会的状況—

平成 19 年度入学
派遣先国：セネガル共和国・マリ共和国
太田雅子

キーワード：写真史，セネガル，地域の成立ち，文化政策，芸術写真，商業写真，生活世界



写真 1. セネガル人写真家の先駆、ママ・カセットの数少ない写真。撮影年・所有者不明

(出典：Saint Léon, Pascal Martin. *Mama Casset: Les précurseurs de la photographie au Sénégal*, 1950. 1994, Paris, Éditions Revue Noire. ©Mama Casset)

対象とする問題の概要

19 世紀半ば、現在のセネガルにあたる地域に仏植民地政権が進出すると、欧米からの移住者が流れ込み、彼らがカメラなどの撮影機材を西アフリカ沿岸に持ち込んだ。欧米の移動写真家や実業家がアフリカの風俗や景色をこぞって写真におさめ、自国に帰って葉書にして販売した。しかし、セネガルの人々がカメラを手にする機会は殆どなく、彼らはつねに「撮られる客体」であった。1960 年の独立以後、サンゴール政権は、「アフリカ人」の文化・芸術を促進する目的で織物、絵画、彫刻などの伝統的な手工芸を対象にした国際展（Festival Mondial des Arts Nègres）を開催した。しかし、そのなかで写真が芸術として取り上げられることはなかった。

セネガルの人々が「撮られる客体」から「撮る主体」へと変化するのが、第二次世界大戦後である。当初、写真は富裕層の間で記念撮影や政府関係の記録として利用される程度であった。写真が様々な場面で撮られるようになったのはここ 30～40 年のことである。

研究目的

本研究は、セネガルで活動する写真家と、彼(女)らが撮影した写真を分析材料とし、写真家、被写体、家族、社会、国にとっての写真の役割を検討することをおして、セネガル人が近代国家のなかで直面してきた経験を個別的・通時的に描き出すことを目的としている。主たる調査地は、セネガル人写真家のさきがけであったママ・カセットや現在活躍している写真家の多くが生活の基盤としているセネガルの首都ダカールとした。

今回の調査は、以下の 3 つに大別できる。まず、欧米で著名な写真家たちへのインタビューを行った。次に、セネガルの写真活動の特徴と文化政策を理解するため、隣国で同じ旧仏領のマリ共和国の首都バマコで 2 年に一度開催されている写真展(写真 3：ビエンナーレ；Rencontres Africaines de la Photographie

à Bamako) を訪問し、活動の様子を観察した。最後に、セネガルでの写真館を訪問・観察し、商業的な写真活動を行っている写真家へのインタビューをした。



写真2. ブナ・メドゥン・セイ
(© Bouna Medoune Seye)

(シリーズ <Les Trottoirs de Dakar> の未発表作品。撮影年不明。セイ氏からいただいたもの)



写真3. バマコでの写真ビエンナーレの様子

フィールドワークから得られた知見について

(1) 「芸術」写真として大規模な国際展に作品を出品している写真家たちとのインタビュー

「1950年代生れ」の写真家たちが中心となって、それまでセネガルにはなかった「芸術」写真というジャンルを1980年頃から開拓したことが明らかになった。その一人であるブバカル・トゥーレ・マンデモリ氏によると、「芸術」写真は、「ただ機械的に写真を撮るのではなく、誰にも真似できない写真表現」を意味する。セネガルの人にとって写真は記録という実用的な役割を果たしていたため、公共の場で被写体との関係性が全くない写真を鑑賞するという意識は社会的になかった。このような状況の中で「1950年代生れ」の写真家たちは、ネットワークを築きあげ、セネガルのフランス文化院の支援のもと<Mois de la Photo>を定期的で開催するほどになった。しかしながら現在では、同展覧会はフランス文化院からの支援が打ち切られたことによって開催されていない。写真を発表できる場が少ないため、セネガルの多くの写真家たちは報道写真で生計を立てる傍ら、独自の芸術表現を探求し続けている。

(2) マリ共和国の首都バマコの写真展を訪問し専門家の集いに参加

本展覧会は海外からのバイヤーを主な対象にして海外の市場に向けて開催されている。マリやアフリカの他の国の人々が本展覧会を訪れることは殆どなく、マリの人々との日常生活とは切り離されたところでアフリカ各地の写真家の作品が展示されていることが明らかになった。

(3) ダカールにある写真館6件で、商業的な写真活動を行っている写真家へのインタビュー

ダカールにおいて芸術写真を海外に向けて発信する機会が減少している一方で、多くのセネガル人は写真館に頼み、自らの歴史を盛んに記録している。例えば、ダカールの多くの女性は、写真館に頼んで、結婚や出産など人生の節目に合わせて記念アルバムを作っている。ママ・カセットの写真と比較すると、写真をカラージュすることで写真館の「場所性」を廃した新しい表現方法で女性像を写しだしている。写真館は住居地域の形成とともに発展してきており、地域の成立ちと密接に繋がっていることが指摘できる。



写真4. ダカールの写真館にて



写真5. 写真館が作っている結婚記念アルバム (写真家不明)

今後の展開・反省点

今回の予備調査からセネガルにおいて写真の表現がどのような過程で「多様化」したのかを把握することができた。今回は芸術写真に重点を置いてフィールドワークを行ったが、今後は、現在のセネガルの人々の生活に根付いた写真とその創出者である、写真館で働いている写真家にも注目して研究を進める。また、写真表現の変遷を歴史的に明らかにするとともに、セネガルの人々の間に写真が浸透していった過程や役割に関して、フィールドワークをとおしてミクロな視点からも検討したい。そして近代国家の様々な変化のなかで「伝統的」価値観とともに生きてきた人々の「生活世界」を、彼(女)らの写真にまつわるサンチマン(感情・感覚)をとおして描き出したい。

具体的には、以下の3点について研究を展開していく予定である。(1)1950年代生まれの写真家が「芸術」写真をうみだすことができるようになるまでの生活の立て方や出会いに関して聞き取りを行う。(2)人口の94%がムスリムであるセネガルにおけるヌードの捉え方、マラブー(イスラームの聖者)を主題としたガラス絵・壁画と写真の相互的な影響、ファッション雑誌の写真の服装の変化や女性の写し方も検討したい。(3)ダカール市内の写真館と写真家を対象に、店舗数の把握、写真を撮影する場面や客とのやり取りの観察。また、写真館に残っている写真のネガを対象にして、当時の撮影状況・機材や社会的な情勢などについて聞き取りを行う。



写真6. ダカール界隈で見られるマラブーの壁画



写真7. 「1950年代生れ」の写真家、Pap BA氏によって実現され、サンゴール生誕100周年を記念した大規模な写真展<サンゴラマ>(2006年)のパンフレット